

台湾から学ぶ時代に即した教育のあり方

千葉県立佐原高等学校 教諭 宮川 淳一

1 はじめに

私は、昨年度から理数科の担任をしている。同じ生徒たちを受け持って2年目になるが、今年度は、クラスの生徒の中でも特に学習意欲旺盛な2名が、夏休みを利用して海外に出向き、一人は韓国でボーイスカウトの活動、もう一人はカナダで英語を学びながら現地の病院の視察をするなど、身近な生徒たちの国際化を意識させられる年になった。そのような中、理数科の生徒限定で千葉県国際教育交流推進事業（台湾派遣）の参加募集があり、カナダに留学した生徒がその事業に申し込むこととなった。この事業には、教員も同行することができるということであったので、ぜひ生徒の海外での活動の様子を見たいと思い、私も参加の申し込みをすることにした。

台湾は、半導体産業での高い技術力があり、IT技術を利用してパンデミックに対する迅速な対応を行うなど、新しい技術を積極的に取り入れ、さらに進歩させている。また、女性が元首に選ばれるなど、日本と比べ、さまざまな面で先進的な印象がある。そこで、千葉県から派遣された生徒の活動だけでなく、台湾の先進性を培う教育現場の様子を視察して、日本の教育活動の進歩につながるヒントのようなものを見出したいと考えた。

2 行程の概略

事業への参加が決定した後、事前研修、オンラインでの打ち合わせ等、二ヶ月ほどの準備期間を経て、台湾を訪問した

当初、学校訪問では、各生徒が在籍する学校の紹介と各自の研究テーマについて発表する予定であったが、日程調整の段階で、当日の発表は2校のみで、残りは帰国後オンラインによる発表を行うことになっていた。発表用のプレゼンテーションソフトのファイル自体は、出発前に全員提出することになっていたため、1日目の夜に行われた学校交流会の準備では、帰国後に発表する生徒も含めて、全員がプレゼンテーションのリハーサルを行った。今回派遣された生徒は、理数もしくは情報に関する学科に在籍しており、理数科の生徒は「理数探究」という科目を履修している。そのため、生徒たちは日頃から探究活動を行っており、その研究成果がプレゼンテーションの中にしっかりと盛り込まれていた。また、全ての生徒が、堂々と英語で発表を行い、今後の国際交流を担う者としての資質を存分に発揮していた。

実際の学校訪問では、現地の代表生徒による歓迎会やキャンパスツアーなど、非常に手厚い歓迎を受けた。派遣生徒は、現地の生徒に混ざって授業に参加し、お互いに英語を使ってコミュニケーションを取り合うなど、双方とも立派に国際交流を行っていた。学校訪問の詳細については後述する。

企業訪問では、台北メトロと呼ばれる鉄道会社とデジタルコンテンツを制作するブロージェントという会社に伺った。台湾メトロでは、路線全体の運行状況を把握し、コントロールしている部屋を見せていただいた（図1）。運行している車両には重量センサーがついており、乗客はスマートフォンのアプリを使って、混雑している車両を避けて乗車することができるのとことである。台湾がIT先進国と言われる理由



図1 台北メトロ

が、こういうところにあるのだなど感じられた。ブロージェントが手がける主なデジタルコンテンツは、いわゆるバーチャルリアリティーを使ったアトラクションである。世界中で事業を展開しており、日本のレジャー施設でもブロージェントの製品が採用されているとことである。台北市の商業施設内にある、台湾全土を旅行するというアトラクション（図2）に招待していただき、3Dの映像を観るだけでなく風や匂いを感じながら空を飛ぶという驚愕の体験をさせていただいた。



図2 ブロージェント

写真は、ブロージェントが制作した i-Ride というアトラクションの入口である。台北市の微風南山という商業施設内にある。

4 日間の行程では、現地のガイドと通訳に同行していただき、さまざまな情報を提供していただいた。故宮博物院や剥皮寮歴史街区、中正紀念堂では、古代からの中国の歴史や日本統治時代の台湾、第二次大戦から現在までの台湾の状況を詳しく説明していただき、士林夜市や東三水街市場、龍山寺では、台湾の風習や文化の説明をしていただくなど、教科書だけでは得られない貴重な知識を得ることができた。移動中のバスでは、台湾の気候や食文化をはじめ、社会情勢など、さまざまな話をしていただき、どれも興味深い内容であり、考えさせられる内容でもあった。

3 桃園市立内壠高級中学校

台湾の教育制度は6・3・3・4制で、日本の小学校・中学校・高校・大学に相当する学校があり、日本の「高等学校」は、台湾では「高級中等学校」となる。そのうち、高級中等学校までの12年間を国民教育と呼び、9割以上の生徒が大学に進学している。

内壠高級中等学校のホームページを見ると、在籍生徒2016人、一学年19クラスで、そのうち1クラスが美術コースとなっている（図3）。正門からバスで入ると、真っ赤な掲示物（図4）が目に入った。撮影した写真を拡大してみると、「大学多元入学成績優異」というタイトルがあり、後でスマートフォンを使って翻訳してみると、「優異」とは「優秀で特別な」という意味であった。卒業生のほぼ全員が大学に進学するはずなので、おそらく難関大学に合格した生徒の一覧が掲示さ



図3 1年19班の標識

「班」は日本の「組」に相当する。1年19組という表示の下に、生徒が作成したと思われる「頑張れ美術クラス」の表示も見られる。



図4 大学多元入学成績優異

正門の内側に大学入試で優秀な成績を収めた生徒の一覧が表示されている。学校を取り囲む塀の外にも、合格した大学名などが記入された赤い提灯が飾られている。

みや自身の学校に対する誇りのようなものが感じられた。

校舎に入ってから歓迎式の会場までの道のりで、1時間目の授業風景を見学させていただいた。クラスの黒板は、中央部を開けると電子黒板が現れる構造をしており、ほぼ全てのクラスが電子黒板を使用して授業を行っていた(図5)。また、教室の大きさは日本と大差はなかったが、教員は全員マイクを持って解説しており、ICT技術や視聴覚機器の導入がかなり進んでいることがわかった。

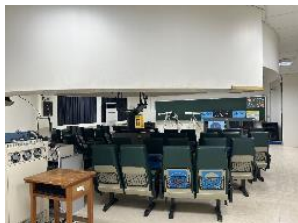


図7 プラネタリウム

上：廊下の表示
中：座席の様子
下：投影機

小規模ではあるが、1クラスが入れるほどの大きさであった。

れているものと推測できる。写真を拡大しても、すべての情報は読み取れなかったが、クラスごとに区分された表示になっており、1クラスあたり30前後のリストがあることから、在籍する生徒の大部分が自身の希望する大学に入学しているものと考えられる。また、歓迎式の中で、卒業生が大学合格を記念して赤い提灯を飾るといふ行事も紹介され、学校全体の学業に対する意気込



図5 教室での授業風景

電子黒板を使用し、教員はマイクを使用している。



図6 地学室

スクリーンには日本語も交えた指示や説明が写し出されていた。

歓迎式の後、「特別教室棟5階の地学室、四季の星空を識別する授業(行程表の原文: 専科大樓五樓地科教室、四季星空辨識課程)」及び「図書館302教室、Photopeaを使ったデザインの授業(行程表の原文: 圖書館302教室、基本設計Photopea課程)」を見学した。どちらの授業もグループ学習的な要素が強く、生徒たちは開始と同時に自分たちのグループに日本人生徒を一人ずつ連れて行き、一緒に授業に参加するというスタイルであった。生徒たちは、英語を使って積極的に話し合い、授業後にはSNSのアカウント交換をするなど、派遣生徒と現地の生徒の国際交流に対する関心の高さが感じられた。

前述したように、ICTや視聴覚機器など、学校の設備は非常に充実しており、地学室では、2つのスクリーンに映像が映し出され、各生徒に1台のパソコンが用意されていた。また、生徒たちは、星空を学習するソフトをごく普通に利用していた(図5)。授業の後半は、地学室の隣にあるプラネタリウム(図6)に移動し、星空の解説が行われた。解説は全て中国語であったため、内容は全く理解できなかったが、ときどき生徒たちの笑い声が聞こえ、ジョークを交えながらの楽しい解説がされていたようである。

デザインの授業は、まずインターネット上の地図から自分で決めた風景をサンプリングし、その画像を **Photopea** というソフトで加工するという内容であった(図7)。故障しているコンピュータが何台もあったが、そこに当たってしまった生徒は、別に保管されているタブレットを取りに行くなど、コンピュータやタブレットを使った授業が、普段からごく当たり前に行われているようである。



図7 デザインの授業

左：Photopea というソフトを使って写真を加工するという授業内容であった。
右：LL教室を転用しているようである。

4 大規模な校舎と教育に対する設備投資

台湾では、少子高齢化が日本以上に深刻な問題となっている。その一方で、教育への投資に力を入れ、将来の技術革新に対応できる人材の育成を目指している。また、国際的な教育交流を進めており、留学生の受け入れや台湾の学生の国際的な経験の拡充に力を入れている。内壠高級中学校でも、教育設備を充実させており、複数の国々に生徒を派遣させるなど、グローバルな視野を持った人材を育成しようとしている。台湾は、こうした取り組みから、将来の労働力不足や社会保障の課題に対処しようとしているのではないかとと思われる。



図8 大規模な校舎

左：校門から入ってすぐの正面からの写真
右：校舎内から中庭を写した写真
上履きを使う習慣はなく、廊下には窓がない。南国風の建築物で、大学のような印象を受ける。

台湾での授業の様子をよく観察すると、日本人の生徒と積極的に関わりを持とうとする生徒が目立っていたが、一人で黙々と課題に取り組むような生徒がいなかったわけではなく、また、外国にルーツを持つと思われる生徒がいたりするなど、教員も生徒も「多様性」を受け入れていると感じられる場面が多かった。生徒の服装については、歓迎式で吹奏楽の演奏を披露してくれた生徒たちは、制服を着用していたが、生徒の大部分は、学校名の入ったジャージや私服のパーカーを羽織って授業に参加していた。ホームページにある生徒手帳の内容を見ると、普段から身だしなみを整える義務が記載され、卒業式などの式典では制服を着用することや、3年ごとに服装規定を見直すことなどが書かれていた。伝統を重視しつつも、時代による服装に対する意識の変化に、積極的に対応していくという方針が感じられた。

内壠高級中学校は、日本ではなかなか見られない大規模な学校である(図8)。大規模な学校であれば、さまざまな個性を持った生徒や教員が集まり、設備投資も比較的行きやすいのではないだろうか。千葉県は、地域によっては非常に生徒が少なく、学級減が進んでいる状況にある。しかし、都市部には大規模な学校も存在している。あとは、そのような学校に「留学」するような意気込みで、比較的遠い地域からも個性的な生徒たちが集まっていけば、今後の日本を支える人材の育成につながるのではないだろうか。